



家族と

なったきっかけは、AC時代に受けた三つの衝撃だった。一つ目の衝撃とは、学生の国籍が七〇以上もあるキャンパスでアジア人との付き合いが一番自然にできたこと。それまで、アジア、特に東・東南アジアの人との関わりはあまりなかったのでもとも新鮮な発見だった。二つ目は、中国大陸(つまり共産中国)との出会い、殊に張芸謀(チン・イーモウ)監督の「紅高粱(紅いコーリャン)」、「大紅燈籠高高掛(紅夢)」などに代表される映画、そしてその作品に主演していた女優コン・リーへの淡い憧れからはじめた中国語。アトランティック校では、大半が欧米人のクラスのほか、漢字を習得している日本人としては相当のアドバンテージのあるところ

だったが、とにかくボキャブラリーや言い回しの違いには驚かされた(教鞭を執るイギリス人の教師を時折疑ったものだった)。三つ目は、ヨーロッパ人にとって数カ国語話せるのは格別まれではないなかで、アジアの島国日本から来てアジアの言葉を知らずに一生は終えられない、英語を介してではアジア人同士の真の意味疎通などは図れないとの意識の目覚めだった。

中国語は、最近では納豆を食べる頻度ほどにしか話さなくなっているが、カンボジアの片田舎の道端の食堂でさえも朝粥を中国語で注文できてしまう、そして店の主人もそれに違和感を持たない、こんな状況を考えると、いかにこの華人文化がアジアに根を生やしているか知らされ、またこの地域で生きるうえでは英語以上に役に立つように思われる。

## 👂 聞く耳を持つてこそ 成り立つコミュニケーション

現在は独立し、有志とともにメコン川流域各国を跨ぐ企業群を形成しつつある段階だが、主な収入はいわゆる広告業としての仕事からくる。しかし、グループでは仕事を広告という一方的なものではなく、ブランドと消費者をつなぐ双方向的なコミュニケーションの橋ととらえている。今まで培

ってきたUWCの基本的な精神、「人」と「人」をつなぐ橋、これを経営者含めスタッフ全員が大事にすることができれば生業も自ずとうまくいくものと思っている。

コミュニケーションは聞く耳を持つて初めて成り立つものだと思う。自己主張をする、自分の立場を貫く、このようなことも相手の立場になりきった上での相互理解があつて初めて有用なものになるのだと思う。このことは驚くことにマーケティングや広告の世界ですら、やっと最近になって常識とされるようになった。

知識とは、経験や体験があつて初めて現実味を持ち役に立つものだが、UWCでは生まれや育ちの環境や条件がまったく異なる人間同士の日々のぶつかりにより生まれる(非日常的な)日常の矛盾や悩みが、世界的な視野に立った経験や体験を与えてくれ、卒業後の知識の吸収に現実味と有用性を持たせてくれる。そして何よりも、人間として存分に聞く耳を持つための訓練の場を提供している唯一無二の教育機関だと思う。

一国主義や独善的な行動、覇権主義がメディアなどを通して議題に上る昨今であるからこそ、バラエティーに富んだ、彩り豊かな国際社会、地域社会を育むために、多くのUWC卒業生には活躍を願いたいものである。

# 人と人をつなぐ

# 橋づくりを学んだUWC

一九七一年生まれ。八八―九〇年英国UWCアトランティック・カレッジ。九〇―九四年ロンドン大学東洋アフリカ研究スクール。九一―九二年北京師範大学。九四―二〇〇〇年ユニリーバ社。その後、独立。

広告業(フランス在住)

諸富裕典

もろとみ ゆうすけ

## 東南アジアの地で

ラオスと聞くときあまりイメージのわからない国だと思われる方が大半ではないだろうか。それはこの地にやってくる一九九七年までは自分も同じだった。ましてや、UWCアトランティック・カレッジ(AC)に向けて祖国を離れた八八年には思いもつかないことであった。

自分にとって、UWCに行かせていただいたことは、その後いろいろな土地の風に吹かれる一五年の出発点となった。以来、アトランティック在学中のウェールズ、大卒四年間ではロンドンに三年、北京に一年、そして六年間に及ぶ会社員時代にはイギリス、ミャンマーの後、現在の生活拠点であるラオスの首都ビエンチャンに移り、シン

ガポール、タイ、カンボジア、ベトナム、中国雲南省などをビジネスで歩くという貴重な体験を積んだ。その間、多くの国籍の人々と出会い、互いを尊敬し信頼しあえる仲間ができた。

UWCで得る経験は、卒業生一〇〇人いれば一〇〇通りのものがあると思う。そして人によっては、それが在校中に開花し結果することもあれば、ずっと経って芽が出ることもある。自分の場合、社会に出てからこの体験が大いに役に立つこととなった。

この東南アジアの土地は文化的にも経済的にも多彩で違いが大きい。飛べば二、三時間で主要都市の間を移動できるが、一〇種以上の異なる公用語があり、イスラム教、仏教、ヒンズー教、キリスト教などが

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三七〇名以上の卒業生を輩出している。

混在する。そしてその周辺には、中国、インドといった大国があり、わが国や欧米諸国とともにそれぞれ政治的・経済的に影響力を保とうと忙しい。だから、シンガポールやバンコクなどの街は、東京などよりはるかにコスモポリタンな場所である。しかしながら、あまり違和感を感じないのは、昨今のグローバル化のおかげなのか、それともあの二年間の経験があるからであろうか。

## ACで受けた三つの衝撃

そもそも、アジアに首を突っ込むように

当社のデザイン・ワークの一例

